

ライバル関係の認知の基準

—大学生の自由記述の分析から—¹⁾

太 田 伸 幸²⁾

問題と目的

“ライバル”は、スポーツや仕事などで競っている人々に対してよく用いられる用語である。本人が「ライバルはあの人です」と述べることもあるし、周りから見て、「あの二人はライバルだ」と表現することもある。しかし、競っているからといって全ての人にライバルという表現を用いるわけではない。どういう存在がライバルと表現されるのであろうか。

Deutsch (1982), Wish, Deutsch, & Kaplan (1976) は仕事上の営業成績を競う関係をライバルと表現している。また, DeSteno & Salovey (1996), White (1981) は、恋愛において特定の相手をめぐって競う関係をライバルと表現している。このように心理学研究で“ライバル”という用語が使用される場面は、仕事、恋愛に関する場面が多い。このどちらの場面でも、どちらか一方しか達成し得ない一つの目標について競争している関係に対して、“ライバル”という用語が用いられている。これは Deutsch (1949a) が定義した競争であり、目標を達成するのは競争者の内の一人のみとなる。このときの当事者の興味は、相互交渉の過程よりも結果に注がれるため、研究の目的は競争の対象となる仕事や恋愛となり、ライバルに関する考察は行なわれていない。

これに対して、具体的なライバルの人物像についての研究では、室山 (1995) が、ライバルを「課題を媒介として競争する相手で、実力が同程度であり、競争によってお互いに良い影響を及ぼしあう相手」として定義している。この定義は、ただ競争するだけの関係をライバルとして認知するのは難しいことを現わしている。太田 (1998) は、高校生に対して質問紙調査を実施し、学習

におけるライバルの人物像を3類型（好敵手、目標、基準）に分類した。この類型の中で、室山の定義しているライバルに相当するのは「好敵手」のみである。他の2類型は、実力が同程度でない場合や一方的にライバル認知を行なっている場合である。したがって、この2類型では室山の定義にあるような「お互いに良い影響を及ぼしあう」ということは考えにくい。このように実際に認知されるライバル自体に認知する対象の個人差が存在するため、室山のライバルの定義だけでは、ライバルとはどういう存在かという検討は不十分ではないかと考えられる。太田 (1999) はさらに、実際のライバルについてもそのライバルに対する認識が異なるように、ライバルを持つ生徒・持たない生徒の間のライバルに対する認識に相違があることを指摘した。これは潜在的なライバル像が個人に存在することを示唆している。

本研究ではこうしたライバルに関する認識、個人に潜在的に存在するライバル像を“ライバル観”と定義する。このライバル観は生徒に個々に内在化されていると考えられる。そのため、生徒ごとに個人差が見られるのは当然である。だが、ライバルを持つ・持たないに関して、その相違が指摘されており (太田, 1999), こうしたライバル観が、生徒のライバルを持つ・持たないという意識に影響を与えることは容易に想定できる。であれば、ライバル観の内容を明らかにすることで、どのようなライバル観が生徒に存在しているのか、ライバルを持つ生徒と持たない生徒とではどのようなライバル観の相違があるのか、といった考察を行なうことが可能になるであろう。しかし、先行研究において、ライバル観についての検討は行なわれておらず、どういったライバル観が考えられるかについては明らかとなっていない。そのため、ライバル観を測定する尺度についても検討がされておらず、既存の尺度を利用した検討は不可能である。そこで本研究では、ライバル観についての自由記述を基に検討を加えていく。分析に関しては、カテゴリーデータの分析手法の一つである、数量化Ⅲ類を主に用いて進めていくこととする。

1) 本研究の一部は日本グループダイナミクス学会第47回大会において報告された

2) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程（後期課程）

本研究では、学習場面に限らず、ライバル一般についてのライバル観の記述を集め、その分析を通して、どういう基準で二者関係をライバルと認知するのかという、ライバルの認知基準を明らかにすることを目的とする。

方法

調査対象 愛知県内の国立大学学生76名(男性34名,女性42名,平均年齢20.8才)

調査時期 1999年5月中旬,講義時間の一部を用いて集団実施した。回答時間はおよそ15分であった。

調査紙 以下の3種類の質問項目群よりなる質問紙を作成した。

1) **ライバル観の自由記述**: 自分がライバル関係にあると思う, 小説, 漫画, ドラマ, スポーツ等の人物を記述し, その二者関係がライバル関係だと思う理由・特徴について記述する。関係の回答欄は3個設け, 各回答欄に理由・特徴の記述欄を5個設けた。被験者には3個まで関係を記述し, 各関係について理由を3~5個記述するように質問文上で教示した。

2) **現在のライバルの有無**: 現在ライバルが存在すると回答した被験者に, ①何についてのライバルかという記述, ②ライバルとして意識し始めた時期, ③ライバル意識の方向性, ④成績の差, について回答を求めた。

3) **高校時代の学習におけるライバルの有無**: 高校時代に学習のライバルが存在すると回答した被験者に, ①ライバル意識の方向性, ②成績の差, について回答を求めた。

回答方法は, 1), 2)-①・②が自由記述, 2)-③, 3)-①が「自分だけがライバルと思っている」~「相手もライバルと思っている」の4件法, 2)-④, 3)-②が「自分の方が上」~「相手の方が上」の5件法である。

結果

(1) ライバルの存在の有無・競争の内容

現在ライバルが存在すると回答した被験者は76名中27名であった。競争の内容は, 高学年に就職・進学・勉強という記述が多く, 生活全般・考え方といった総合的なものについては, すべての学年にわたって記述が見られた。就職・進学といった進路に関する問題は, 高学年になるほど現実問題として認識されるため, 進路のライバルが認知されたのであろう。また, 高校時代の学習のライバルについては76名中44名にライバルが存在した。高校・大学におけるライバルの有無をTABLE 1に示した。

次に, 高校・大学でのライバルの有無について, TABLE 1を基に χ^2 検定を実施したところ, 有意差が認められた($\chi^2_{(1)}=5.32, p<.05$)ため, さらに残差分

TABLE 1 ライバルの有無

	高校時代のライバルの有無		計
	存在する	存在しない	
現在のライバルの有無			
存在する	21 2.31*	7 -2.31*	28
存在しない	23 -2.31*	25 2.31*	48
計	44	32	76
上段: 観測度数 下段: 調整された残差 * $p<.05$			

析を実行した。その結果, 高校・大学を通してライバルが存在するもしくは存在しない被験者の割合が高いことが明らかとなった。

(2) ライバル観の記述の分類

ライバル観の記述のない被験者が3名存在したため, 以降の分析ではこの3名を分析から除外し, 73名を分析対象とした。ライバル関係の記述は99種類, 延べ150個の関係があげられた。理由の記述数は453個があげられた。これは一人あたり5.96個, 一関係あたり3.02個の記述にあたる。

この記述を, 内容的に同じ記述, ほぼ同じ意味内容を指すと考えられる記述をまとめた結果, 68カテゴリーにまとめられた。この68カテゴリーに対して, 筆者を含む心理学専攻の大学院生2名により検討が加えられた。さらに意味内容が近いカテゴリーをまとめて一つにした結果, 最終的に21カテゴリーに分類された。この21カテゴリーのカテゴリー名と記述例, 記述人数をTABLE 2に示した。

(3) ライバル観の軸の抽出

被験者ごとにTABLE 2のカテゴリーにしたがって記述を分類し, 各カテゴリーに当てはまる記述があるかないかの2進データマトリックス(ある=1, ない=0)を作成した。そのマトリックスを用いて数量化Ⅲ類を実施し, 被験者の持つライバル観の傾向の軸を抽出した(TABLE 3)。固有値の値から3軸が妥当であると判断された。この3軸までの累計説明率は28.4%であった。

第1軸の正方向には「努力している」「片方が優位にある」「立場が逆」, 負方向には「目標が同じ」「高め合う」などの項目があり, 相手との競争関係についての軸と考えられるので, 第1軸を「競争-協同」の軸と命名した。相手に与える影響の大きさがこの軸に反映していると考えられる。特にお互いへの影響が大きい項目が負方向に集まっていたことから, それは明らかである

TABLE 2 カテゴリー名と記述例, 記述人数

カテゴリー名	記 述 例	記述人数
1. 同性・同年代	同性, 同年齢, 同級生, 同期生, 双子, 兄弟	23
2. 同等の実力	同じ実力である, 二人とも同じように〇〇である	39
3. 共通の勝負基準	二人とも〇〇をしている, 共通の勝ち負けの基準がある	11
4. 相違点がある	〇〇は似ているが××は異なっている	16
5. 比較をする	自分と相手を比べる, いつも相手と比較して考える	7
6. 比較される	周りから比較される	18
7. 仲が良い	お互いに仲がよい	2
8. 仲が悪い	お互いを嫌っている, お互いに憎んでいる	11
9. 立場に近い	似たような立場にある, 同じ立場にある	27
10. 立場が逆	ピッチャー対キャッチャー, 怪盗対名探偵	11
11. 片方が優位にある	片方が負けたという感情を持つ, 片方が優位な立場にある	10
12. 勝負している	争っている, 勝ったり負けたりしている, 競っている	23
13. 相手を認めている	互いに相手を認めている, 助け合うことがある, 相手がいなくなることを惜しむ	13
14. 相手を認めていない	相手を認めていない部分がある	3
15. 努力している	同じところで頑張っている, 二人とも努力している	5
16. 相手が目標	相手に負けたくないと思う, 相手に勝とうとする, お互いに負けまいとする, 相手を目標としている	13
17. 目標が同じ	同じ目標に向かって努力している, 同じ目標に向かって争っている	21
18. 高め合う	お互いに高めあっている, 勝負によって高めあっている, お互いに刺激しあっている	16
19. 負けず嫌い	お互いに劣等感を持っている, お互いに負けず嫌い, お互いに個性を主張したい	25
20. 相手を意識している	相手の評価を気にする, 相手がいることで頑張れる	20
21. 三角関係	一人の男(女)が好き, 一人の人をめぐって争っている	14

う。

第2軸の正方向には「努力している」「仲がよい」、負方向には「立場が逆」「片方が優位にある」の項目があり、相手との対人関係についての軸と考えられる。よって第2軸を“友好-敵対”の軸と命名した。仲の良し悪しに関するカテゴリーが正反対の重みを示していたことから友好関係の軸として捉えるのが妥当であろう。

第3軸の正方向には「相手を認めている」「高め合う」、負方向には「仲がよい」「比較される」の項目があり、ライバル関係の内容に関した軸と考えられる。よって第3軸を“好敵手型-宿敵型”の軸と命名した。特に負方向に三角関係が重みを示しており、相手に勝つことが目的、といった考え方の存在の影響が大きいと考えられる。

次に、各次元における被験者の重み係数の重心を、ライバルの有無別に算出した (TABLE 4)。このうち、第1次元、第2次元の被験者の重み係数を用いて、各次元の平均値を基準として、被験者を分類した。第1次元の重み係数が平均以上の場合を競争、平均以下を協同、第2次元の重み係数が平均以上の場合を友好、平均以下

を敵対とし、第1次元と第2次元の組み合わせで4群に分類した。各群の人数はTABLE 5に示した。5未満の要素を持つセルが含まれるため、このクロス集計表に対してFisher Exact Testを実施したところ、有意差は認められなかった ($p < .499$, *n.s.*)。しかし、各軸ともライバルが存在する被験者の方が正方向に重心があり、ライバルが存在しない被験者の重心はともに負方向にあった。特に第2軸の友好-敵対に関して重心の位置の差が大きく、ライバルを持つ・持たないにより大きな影響を与える信念は、ライバルを友好的なものにとらえるか否かということではないかと推測される。

(4) ライバル関係の典型例

複数の被験者がライバル関係にある二者としてあげ、理由の自由記述が10個以上集まった関係は8関係あった。この8関係をライバル関係の典型例とし、記述されたカテゴリーと共にTABLE 6に示した。次に、関係ごとにカテゴリーに当てはまる記述があるかないかの2進データマトリックス (ある=1, ない=0) を作成した。全

TABLE 3 ライバル観の数量化Ⅲ類

	DIM 1	DIM 2	DIM 3
1. 同性・同年代	.42	-.25	-.65
2. 同等の実力	-.12	-.04	-.18
3. 共通の勝負基準	-.16	.48	-.16
4. 相違点がある	.04	.07	-.46
5. 比較をする	-.47	.74	.41
6. 比較される	.00	-.08	-.84
7. 仲が良い	-.44	.84	-1.56
8. 仲が悪い	.26	-.66	.10
9. 立場が近い	.19	-.44	-.32
10. 立場が逆	.50	-1.86	.28
11. 片方が優位にある	1.78	-.75	.81
12. 勝負している	.01	.13	.77
13. 相手を認めている	-.50	.36	1.02
14. 相手を認めていない	-.41	.46	-.08
15. 努力している	3.38	2.37	.28
16. 相手が目標	-.51	.09	.18
17. 目標が同じ	-.07	.31	-.29
18. 高め合う	-.62	.10	.92
19. 負けず嫌い	.11	.57	.02
20. 相手を意識している	-.41	-.30	.40
21. 三角関係	-.24	.27	-.70
次元間相関			
DIM 1	-	.26	.15
DIM 2		-	-.11
DIM 3			-

TABLE 4 重み係数の重心

	ライバル存在	ライバル不在
競争-協同	.243	-.045
友好-敵対	.206	-.145
好敵手型-宿敵型	.134	-.016

TABLE 5 各群の人数

	競争-友好	競争-敵対	協同-友好	協同-敵対
ライバル存在	4	5	14	4
ライバル不在	4	15	19	9
	8	20	33	13

$p < .499, n.s.$

TABLE 6 ライバル関係の典型例

関係	記述人数	記述数	記述されたカテゴリー
1. 「ガラスの仮面」の北島マヤと姫宮亜弓	10	30	2・4・9・10・11・12・13・16・17・18・19・20
2. 中日・川上と巨人・高橋	7	25	1・6・9・10・12・17・19・20
3. 巨人・長嶋と阪神・野村	6	16	1・2・4・6・8・9
4. 「タッチ」の上杉達也と上杉和也	5	17	1・3・6・7・13・17・18・19・21
5. 「スラムダンク」の桜木花道と流川楓	5	14	1・2・3・8・13・16・17・18・19・21
6. 野村沙知代と浅香光代	5	13	1・2・6・8・9・16・19
7. フィギュアスケートのタラとクワン	3	12	2・4・5・9・16・17・18・19・20
8. 巨人・高橋と松井	3	10	2・9・12・15・19

ての典型例で記述の見られなかった1カテゴリーと1つの典型例でしか記述の見られなかった4カテゴリーの合わせて5カテゴリーを除き、残り16カテゴリーのデータマトリックスを用いて数量化Ⅲ類を実施し、第2次元まで抽出した。第2次元までの累積説明率は50.1%である。第1軸は「勝負している」「立場が近い」が正方向に、「共通の勝負基準」「三角関係」が負方向に高い負荷を示しており、「勝負の質（公的-公私両方）」の軸と命名した。第2軸は「仲が悪い」「比較される」が正方向に、「立場が逆」「相手を意識している」が負方向に高い負荷を示しており、「お互いに対する感情（敵対心高-敵対心低）」の軸と命名した。TABLE 7 に各次元に対する項目と典型例の重み係数を示した。

典型例としてあげられた8つの関係をプロットしたところ、3クラスター構造が認められた（FIGURE 1）。第1クラスターには第1軸に高い負荷を示す4関係（「巨人・高橋と松井」「中日・川上と巨人・高橋」「フィギュアスケートのタラとクワン」「ガラスの仮面の北島マヤと姫宮亜弓」）が分類され、公的な場で同じ目標に向かって競争している関係であるので、「勝負重視の関係」と命名した。第2クラスターには第2軸に高い負荷を示す2関係（「巨人・長嶋と阪神・野村」「野村沙知代と浅香光代」）が分類された。どちらもお互いに対する敵対心をクローズアップされやすいことから「犬猿の仲」と命名した。第3クラスターには第1軸に負に高い負荷を示す2関係（「タッチの上杉達也と和也」「スラムダンクの桜木花道と流川楓」）が分類された。公的な場（野球、バスケット）と私的な場（三角関係）の両方で競っている関係であるので、「公私共に競っている関係」と命名した。

考察

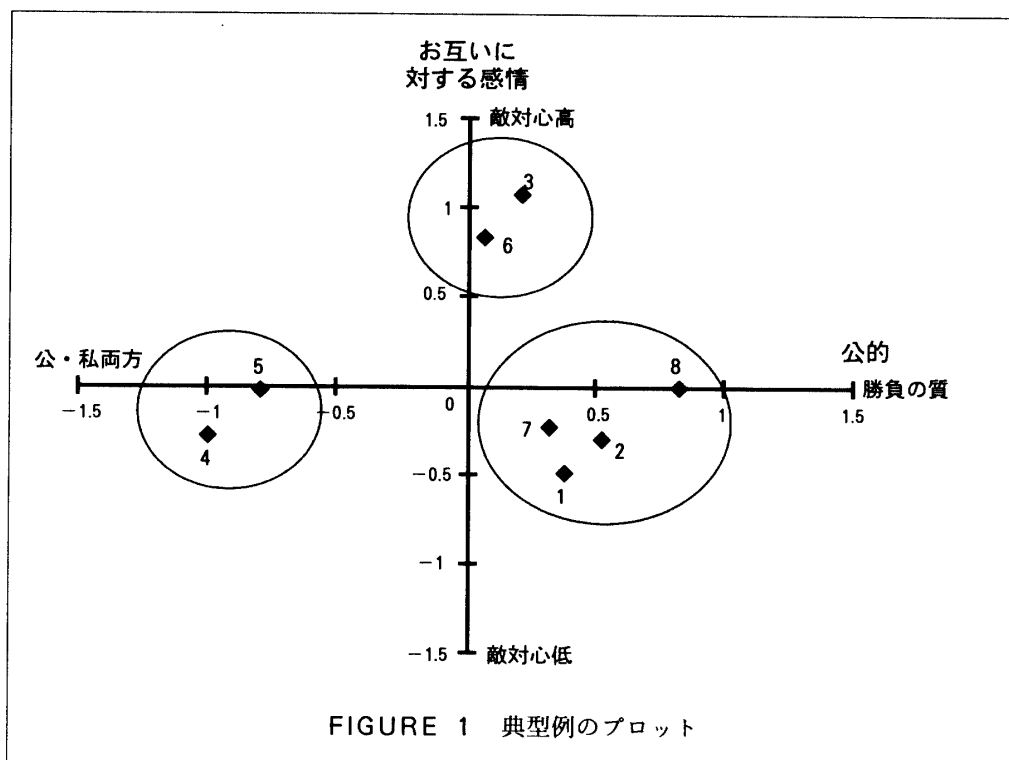
(1) 自由記述のカテゴリー

本研究で行なった分類の結果、先行研究で特に“ライバル”という用語が用いられる競争についてのカテゴリー（勝負している、三角関係）ばかりでなく、協同に関するカテゴリー（高め合う、相手を認めている）や類似性

TABLE 7 ライバル関係の典型例の数量化Ⅲ類

	DIM 1	DIM 2
1. 同性・同年代	-.33	.51
2. 同等の実力	.28	.37
3. 共通の勝負基準	-1.51	-.28
4. 相違点がある	.50	.22
6. 比較される	-.09	.65
8. 仲が悪い	-.29	1.23
9. 立場が近い	.65	.28
10. 立場が逆	.76	-.79
12. 勝負している	.97	-.54
13. 相手を認めている	-.79	-.52
16. 相手が目標	-.01	.04
17. 目標が同じ	-.19	-.52
18. 高め合う	-.46	-.50
19. 負けず嫌い	.08	-.14
20. 相手を意識している	.69	-.68
21. 三角関係	-1.51	-.28
<hr/>		
1. 「ガラスの仮面」の北島マヤと姫宮亜弓	.38	-.50
2. 中日・川上と巨人・高橋	.53	-.30
3. 巨人・長嶋と阪神・野村	.20	1.07
4. 「タッチ」の上杉達也と上杉和也	-1.01	-.27
5. 「スラムダンク」の桜木花道と流川楓	-.79	-.02
6. 野村沙知代と浅香光代	.07	.82
7. フィギュアスケートのタラとクワン	.32	-.23
8. 巨人・高橋と松井	.83	-.02

上段：分類カテゴリー 下段：典型例



に関するカテゴリー（同性・同年代，同等の実力），仲の良さ（仲が良い，仲が悪い）をあげたカテゴリーも存在した。

回答頻度では類似性に関するカテゴリーである「同性・同年代」，「同等の実力」，「立場に近い」は，多くの被験者がライバル関係にある二者の特徴としてあげていた。これは，太田（1998）が双方向的なライバル関係としてあげている「好敵手」の特徴と一致する。また，相手との関係性・協同に関するカテゴリーである「高め合う」，「相手を認めている」，「相手が目標」，「相手を意識している」なども好敵手の特徴に当てはまるため，「好敵手」的なライバルがライバル関係の認知の基準的なものとなっていると考えられる。

明確な競争関係を現わすカテゴリーとして，「勝負している」，「負けず嫌い」，「三角関係」などがあげられる。これらのカテゴリーは，類似性のカテゴリーと同時にあげられることも多く，対等な関係で競っている関係をライバル関係として認知しやすいことを示唆している。しかし，特に「三角関係」などでは，競っているがゆえに「仲が悪い」関係であると判断される場合も見られた。

(2) ライバル観の軸

Deutsch (1949b) が提示した人間関係の基本次元では，友好－敵対関係は協同－競争関係に内包されていた。すなわち，協同は友好関係，競争は敵対関係を現わすととらえられていた。これに対して中村（1983）は，「確かに競争は敵対関係を含み，協同は友好関係を生み出していることは多いと思うが，目標に力をあわせているからといって，相手への感情評価が好意的である保証はない」と述べている。これは，競争条件において好意的な感情を抱いたり，協同条件において非好意的な感情を抱いたりする可能性を示唆しており，友好的な競争関係や敵対的な協同関係も存在しうることを現わしている。本研究の結果は，第1次元に協同－競争の軸が，第2次元に友好－敵対の軸がそれぞれ独立の次元として抽出されており，中村の指摘を支持するものであった。これは，室山・堀野（1991）の，「競争しているからといって必ずしも競争相手に対する否定的対人感情が形成されるとは限らない」という指摘からも明らかであろう。また，これは競争が相手に対する肯定的な対人感情の形成を疎外する（e.g. Deutsch, 1949b; Sherif, 1966; Sherif, Harvey, White, Hood, & Sherif, 1961）という知見とも異なる結果となっている。競争・協同といった行動と，それに伴う対人感情とは必ずしも一義的に定まるわけではないといえよう。

第1次元の協同－競争，第2次元の友好－敵対の各軸

は，中村（1983）の対人相互関係における3つの次元の内，目標性（協同－競争）の次元と結合性の次元（友好－敵対）にそれぞれ対応している。よってこの2次元は，相互関係の捉え方の次元として解釈できるだろう。この2次元を用いて行なった被験者の分類結果では，その人数比には有意差が見られなかった。しかし，競争－敵対群と協同－友好群のみで人数比を見た場合には，ライバルが存在する被験者の方が，よりライバルを協同－友好的に見ていることがうかがえる。ライバルという競争関係として捉えられがちな関係であっても，関係の中に協同的成分を見いだしていることの現われであると考えられる。すなわち，ライバルを協同的な関係であるととらえるライバル観が，ライバルを持つ被験者に存在しているのであろう。

また，最も多く記述された「同等の実力」は，どの軸にも高い負荷を示さなかった。これはほとんどのカテゴリー属する記述と同時に記述されていたため，特徴的なカテゴリーとして現われなかったのであろう。すなわち，同程度の実力にある二者がライバル関係にあるという認識が，各軸に共通して現われた結果であると考えられる。

(3) ライバル関係の典型例

被験者の記述を用いた数量化Ⅲ類の分析において“好敵手型－宿敵型”の軸が抽出されていた。これは認知基準の軸というよりも，ライバルの典型例の軸としてとらえる方が妥当であろう。被験者がライバルとして考える関係には，関係を問わずこうした一定の傾向があることを示唆している。

特徴的な典型例として敵対関係（犬猿の仲）があげられる。相手に対する敵対心，競争心がライバル関係の特徴であることをより強く表現されている関係であろう。実際のライバルとの関係の分類（室山，1995；太田，2000）と比較すると，室山の分類では見られるが，太田の分類では見られなかった。このように，実際のライバルとの関係ではあまり認められない関係であろう。しかし，ライバル観としては，より明確にライバルとして認知されやすい関係があげられるため，競争関係，否定的対人感情を強調される関係がライバルとして認知されたのであろう。

典型例を分類する基準として「勝負の質」と「相手に対する感情」の2軸が抽出されていた。「相手に対する感情」の軸では「犬猿の仲」に対する影響が大きい。相手に対する敵対心や嫌悪などの否定的対人感情が重視される「犬猿の仲」では，そうした相手に対する否定的対人感情があるがゆえに競争事態が生じると考えられる。したがって，「犬猿の仲」は競争の内容よりも相手に

対する否定的感情の強さを認知した典型例である。「勝負の質」の影響が大きい「勝負重視の関係」、「公私共に競っている関係」では、「相手に対する感情」の影響は見られない。競争心は存在するとしても、こうした典型例では相手に対する否定的感情があまり表面化していない関係であるといえる。「勝負重視の関係」では競争の対象になっている場面での相互関係がライバル関係であると重視される理由となっている。そのため、勝負を離れた部分ではあまりお互いをライバルと意識しない部分が多いと考えられる。「公私共に競っている関係」では勝負の場が公的な場（野球、バスケット）と私的な場（三角関係）の両方にあり、「勝負重視の関係」以上に人間的な相互関係がライバルとして認知されているのであろう。

まとめと今後の課題

本研究では、ライバル認知の基準の検討を行なうために、被験者と被験者の記述による分析と、関係の記述とその関係がライバルだと思ふ理由の記述による分析を実行した。被験者の記述からの分析では、中村（1983）の対人相互関係の3次元の内、目標性（協同-競争）、結合性（友好-敵対）の2次元からライバルをとらえる基準が存在することが明らかにされた。関係の記述の分析からは、相手に対する感情を重視する基準と、競争の内容を重視する基準が認められた。どちらにおいても、競争関係の質と対人感情によって、ライバル関係をとらえる基準が存在するととらえることができる。

今後は、こうしたライバル関係の認知基準がどの段階で認められるのかといった、ライバル観の発達についても検討していく必要がある。また、そうした検討を行なうために、各発達段階におけるライバル観を測定する尺度の開発も必要となるであろう。

引用文献

- DeSteno, D.A., & Salovey, P. 1996 Jealousy and the characteristics of one's rival: A self-evaluation maintenance perspective. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 22, 920-932.
- Deutsch, M. 1949a A theory of co-operation and competition. *Human Relations*, 2, 129-152.
- Deutsch, M. 1949b An experimental study of the effects of co-operation and competition upon group process. *Human Relations*, 2, 199-231.
- Deutsch, M. 1982 Interdependence and psychological orientation. In Derlega, V. L. & Grzelak, J.(eds.) *Cooperation and helping behavior*. Academic Press. chap. 2, 15-42.
- 室山晴美 1995 ライバルとして記述される対人関係に関する一考察 心理学研究, 65, 454-462.
- 室山晴美・堀野 緑 1991 競争場面における敗北者の課題認知と対人認知-負け方と勝者からのフィードバックの効果- 教育心理学研究, 39, 298-307.
- 中村陽吉 1983 対人場面の心理 東京大学出版会.
- 太田伸幸 1998 学習活動におけるライバル 日本グループダイナミックス学会第46回大会発表論文集, 164-165.
- 太田伸幸 1999 学習におけるライバルの人物像についての基礎的検討 名古屋大学教育学部紀要(心理学), 46, 275-285.
- 太田伸幸 2000 学習におけるライバルの人物像-学習場面において認知したライバルの人物像と関係の認知基準- 日本心理学会第64回大会発表論文集, 1134.
- Sherif, M. 1966 *Group conflict and co-operation: Their social psychology*. London: Routledge & Kagan Paul.
- Sherif, M., Harvey, O. J., White, B. J., Hood, W. R., & Sherif, C. 1961 *Intergroup conflict and cooperation: the robber's cave experiment*. University Books Exchange.
- White, G. L. 1981 Jealousy and partner's perceived motives for attraction to a rival. *Social Psychology Quarterly*, 44, 24-30.
- Wish, M., Deutsch, M., & Kaplan, S.J. 1976 Perceived dimensions of interpersonal relations. *Sociometry*, 40, 234-248.

(2000年9月16日 受稿)

ABSTRACT

Cognitive criteria of rival relations

—An analysis of open-ended question on undergraduate students—

Nobuyuki OTA

The purpose of this study is to examine a “view of rival”, which is defined as what kind of relation between two persons is rival relation. Seventy-six undergraduates (28 students with rival, 48 without rival) were asked to describe their views of rival and those of rival relation. First, descriptions of 455 views of rival were classified for 21 categories. A quantification method of the third type revealed three axes for view of rival: “cooperation – competition”, “friendly – enemy”, and “type of a good match – type of an old enemy”. The findings clarified that the axis affected by whether one had rival or not was “friendly - enemy” and subjects with the rival had view of rival that rival was friendly. A common criterion of cognition of rival relation was “equality of ability”. Second, their 155 descriptions of rival relation revealed three clusters as a model of rival relation: “a relation for taking a leading part to have a match”, “a relation like cat and dog”, and “a relation to compete with both officially and privately”. A cluster “a relation like cat and dog” represented that competition and enmity were important, but it wasn’t much clear on real rival image

Keywords: rival, view of rival, model of rival relation, quantification method of the third type